

発達障害を有する子どもの「食・食行動」の困難に関する 発達支援研究

—発達障害の本人・当事者へのニーズ調査から—

(中間報告)

大阪体育大学健康福祉学部 田部 絢子
山梨市立三富小学校 斎藤 史子
東京学芸大学教育学部 高橋 智

Study on Difficulties and Support Needs of the Dietary Behavior of Children with Developmental Disabilities from View Point of Survey of Persons with Developmental Disabilities

Osaka University of Health and Sport Sciences, TABE, Ayako
Yamanashi City Mitomi Elementary School, SAITOH, Fumiko
Tokyo Gakugei University, TAKAHASHI, Satoru

要約

発達障害者が有する大きな困難の一つに「食・食行動」に関する問題があり、偏食、咀嚼・嚥下等において多様な困難を示すことが指摘されている。しかし、その実態はほとんど未解明である。それゆえに本研究では発達障害の本人・当事者を対象に、彼らがどのような食・食行動に関する困難・ニーズを抱えているのかについて調査し、求めている支援の課題について明らかにした。調査の方法は、刊行されている発達障害者本人の手記をもとに質問紙調査票「食・食行動の困難に関するチェックリスト」を作成して実施した。調査の期間は2012年11月～2013年11月、発達障害の診断・判定を有する本人135名から回答を得た。

【キー・ワード】発達障害, 食・食行動の困難, 感覚情報調整機能障害

Abstract

It is pointed out that one of the important problems is difficulties about dietary behavior which persons with developmental disabilities have. However, the actual condition is not clarified. In this study, we have examined the difficulties and support needs of dietary behavior of children and adolescents with developmental disabilities from view point of survey of person with developmental disabilities. Method of the study was carried out to create a "checklist of dietary behavior difficulties" survey questionnaire. Period of survey was from November 2012 to

November 2013, responses were received from 135 persons with developmental disabilities.

【Key words】 Developmental Disabilities, Difficulties of Dietary Behavior, Sensory Integration Disorder

問題と目的

発達障害者が有する大きな困難の一つに、「食・食行動」に関する問題がある。例えば永井（1983）は、自閉症児 110 名の親を対象に調査を行い、自閉症児の半数以上が偏食を示し、偏食児の多くが乳嫌いや離乳食の拒否など、早い時期から何らかの困難を示していたことなどを報告している。また篠崎ら（2007）は、自閉症スペクトラム児 123 名の親を対象に食品 46 品目の嗜好度を調査し、自閉症児の 40% 近くが共通して食べられない食品が複数存在することを報告している。篠崎らは他にも、発達障害児が「口いっぱい詰め込んでしまう」「よく噛まないで飲み込む」といった咀嚼や嚥下に関する問題を示す割合は、「健常」児と比較してはるかに高いことなども報告した。

高橋・増淵（2008）が、アスペルガー症候群・高機能自閉症の本人・当事者を対象に行った感覚過敏・鈍麻に関する調査においても、「食感がダメで食べられないものがある」33%、「食べたことのないものはとても怖い」17%など、食に関する感覚の問題を示す当事者が少なからず存在しており、彼らが「自分に合った温度に食べ物を温めたい」25%、「初めて食べるものは量を少なくしてほしい」16%、といった食に関する理解・支援を求めていることを報告している。

このような「食・食行動の困難」（偏食、咀嚼・嚥下等）には、特有の感覚情報調整機能障害（「感覚過敏・鈍麻」「感覚統合障害」）や身体症状（身体の不調・不具合）などの身体問題が深く関連していることが徐々に明らかになりつつある（高橋・増淵：2008，高橋・石川・田部：2011，高橋・田部・石川：2012）。しかし、こうした感覚情報調整機能の障害や身体症状については、理解が広がっていないために誤解されやすく、食・食行動の困難に関しても、「わがまま」「甘やかしている」と思われがちである。また、発達障害者の抱える食・食行動の困難の様相はきわめて多様であり、その実態や背景要因、ニーズについて丁寧に明らかにしていくことが必要である。

それゆえに本研究では、発達障害者の食・食行動に関する困難・ニーズの実態と彼らが求めている具体的支援を、発達障害を有する本人への質問紙調査を通して明らかにすることを目的とする。

方 法

1. 調査対象

発達障害（アスペルガー症候群，高機能自閉症，その他広汎性発達障害，LD，ADHD，軽度の知的障害）と診断・判定された方で、発達障害についての認識・理解を有する高校生以上の当事者であり、自身の食・食行動に関する困難・ニーズを振り返って調査回答することが可能な方。また、東京学芸大学において発達障害教育関係の講義を受講している学部・専攻科・大学院の学生にも同様の質問紙調査を実施し、結果を比較検討した。

2. 調査方法

質問紙法調査。刊行されている発達障害者本人の手記をほぼ全て検討し、食・食行動に関してどのような困難や特有の感覚・身体問題を抱えているのかを把握、それらをもとに質問紙調査票「食・食行動の困難・ニーズに関するチェックリスト」全 306 項目を作成。発達障害の本人、発達障害支援関係団体などの協力を得ながら質問紙法調査を実施。調査期間は 2012 年 11 月～2013 年 11 月（現在も継続中）。発達障害の診断・判定を有する本人 135 名、東京学芸大学の学生 119 名から回答を得た。

結果と考察

「食・食行動の困難・ニーズに関するチェックリスト」の結果を発達障害者本人と受講学生で χ^2 検定を行ったところ、306 項目中 110 項目で 1%または 5%水準での有意差が見られた。検定の結果、 χ^2 値が高かった上位 3 項目を図 1 に示す。この 3 項目はいずれも 1%水準で有意差が出ている。 χ^2 値の大きい項目ほど発達障害者本人の有する食・食行動の困難について周囲から理解が得られにくいため困難度が高いと言える。次に、健常学生に比べ発達障害者本人が質問項目との関係性が何倍大きいのかをオッズ比によって推定したもので、値の高かった上位 3 項目を図 2 に示す。

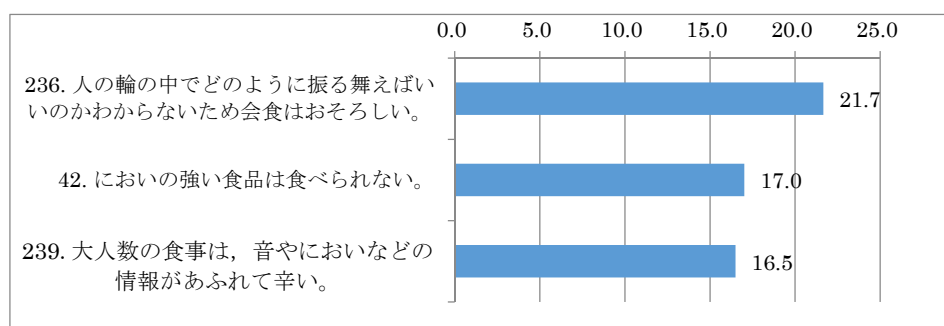


図 1 χ^2 値比較による困難度の高い上位 3 項目

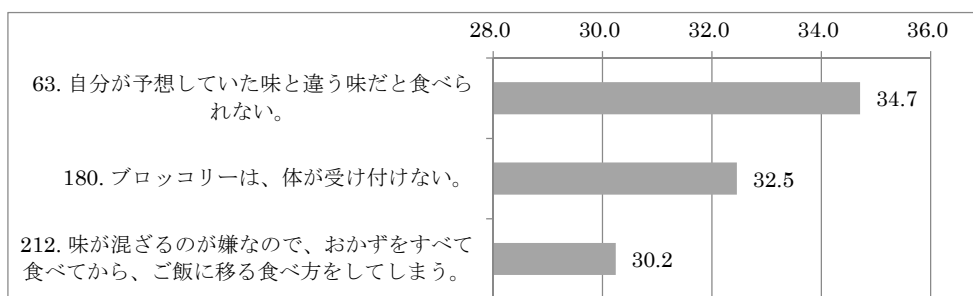


図 2 オッズ比比較による困難度の高い上位 3 項目

χ^2 検定の結果では、「人の輪の中でどのように振る舞えばいいのかわからないため会食はおそろしい」「大人数の食事は、音やにおいなどの情報があふれて辛い」など、人や状況に関する困難が上位に挙げられた。発達障害者本人は、人が多くて騒がしい食事場面や他人と談話しながらの会食、初めての物を初めての場所で食べるといった状況下では、何も食べられないほど強い不安や緊張を感じてしまう人が多いことがわかった。

その背景には感覚過敏など特有の身体感覚を有することや、環境の変化に対して特に強い不安・ストレスを抱きやすいこと、人間関係に対して恐怖感を抱いている場合などが挙げられる。外食では個室のような落ち着いた場所を選ぶ、班やグループでの食事を強要しない、慣れない状況下では事前説明をしたり、食べ慣れている弁当の持参を認めたりなどの支援が必要であろう。

次に、「にょいの強い食品は食べられない」「味が混ざるのが嫌なので、おかずをすべて食べてから、ご飯に移る食べ方をしてしまう」など、嗅覚や味覚といった感覚過敏に起因する困難が上位に挙げられた。食べることににおいては、複数の感覚が統合されて一つの風味を感じているため、感覚に一つでも過敏があるとその他の感覚器の味わい方にも影響を与えてしまう（日下部・和田：2011）。しかし食べ物の色や形、におい、味や温度、食感などは調理方法の工夫によって変えることができるため、苦手なものを強要するのではなく、食べられない要因を取り除くような支援が必要であると考えられる。

その他、空腹や満腹を全く感じない・異常に感じるといった摂食中枢の困難、顎がコントロールできない、上手く飲み込めないなど咀嚼や嚥下の困難、食物アレルギーなどを示す割合が発達障害者本人では有意に高いことなどが明らかとなった。

引用文献

- 日下部裕子・和田有史(2011)『味わいの認知学—舌の先から脳の向こうまで—』勁草書房。
- 永井洋子(1983) 自閉症における食行動異常とその発生機構に関する研究、『児童青年精神医学とその近接領域』24(4)。
- 篠崎晶子・川崎葉子・猪野民子・坂井和子・高橋摩里・向井美恵(2007) 自閉症スペクトラム児の幼児期における摂食・嚥下の問題第1報・第2報、『日本摂食・嚥下リハビリテーション学会雑誌』11(1)。
- 高橋智・増渕美穂(2008) アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究—本人へのニーズ調査から—、『東京学芸大学紀要総合教育科学系』59。
- 高橋智・石川衣紀・田部絢子(2011) 本人調査からみた発達障害者の「身体症状(身体の不調・不具合)」の検討、『東京学芸大学紀要総合教育科学系』62。
- 高橋智・田部絢子・石川衣紀(2012) 発達障害の身体問題(感覚情報調整処理・身体症状・身体運動)の諸相—発達障害の当事者調査から—、『障害者問題研究』40(1)。